五感のデザイン、 共感のライフ・スタイル、そしてリゾート

デザイナー・原研哉氏の構想する、日本にとってこれから必要な資源の 蘇らせ方とは何か。二期リゾート文化顧問の新見隆が「山のシューレ」 の共感共同体の視点から問いかける。

原 研哉 × 新見 隆グラフィックデザイナー キュレーター



美意識こそが日本を立て直す新しいリソース

原「山のシューレ」に参加して二年目の今年は、三泊していろいろなレクチャーを聴かせてもらっています。ふだんは分断されている感覚や知識が、ここに来ていろいろな話を聞いていると、多重につながっていく感じがとても面白いですね。

新見 見えない連鎖のようなものがあちらこちらで生じてくる感じがありますね。

原 今日は、少し大きな視点で観光の話からしたいと思います。僕は日本のこれからの産業の資源は美意識だと思っています。曖昧な視点でもなく、モラリスティック視点でもなく、美意識こそが明確なリソースだと考えています。その資源をどんなふうに運用できるか、これがいま問われていますね。

戦後五十年間、日本は工業国として成長をしてきました。しかし、東アジアの各国と日本の工業力、もの作りの差はどんどん縮まってきています。産業面で、日本がかつてのような独占的な地位をもつことなど、これからはもう二度とないでしょう。

また、本来の日本の価値はそんなものではないという想いもずっとあります。アーキペラーゴ(多島海)という言葉もありますが、海に囲まれた国上の大半が山や森で、この那須のような自然の資源がある。那須にくると、森や小川にみんな感動しますよね。本来の日本はそういう魅力をもった国であるはずです。

新見 リゾートそのものをどう考えるか、デザインとリゾートがどう関連するか。ぜひ原流解釈を聞かせていただきたいですね。

原 観光とデザインという点では、ひとつの可能性があると思います。世界のなかでホテルや宿泊ということに関して言えば、西洋流の高級ホテルではない方法で、その国独自のもてなしの仕組みと食の供応とサービスのスタイルにおいて、日本ほど高い対価を払ってもらえる仕組みをうまく作ることができた国はないでしよう。宿泊施設の単位では諸国にあるかもしれないが、日本の旅館のように一般的な仕組みにはなっていないですね。

たとえば、この二期倶楽部でも、西洋流のホテルの単純明快なオペレーションとは違う、どこか謎めいたおもてなしの世界があって、泊まってみたいなと思わせる気配に満ちています。

新見 二期倶楽部はよくそんなイメージを持たれるようで、ある種の神秘性を感じさせることは、逆に面白いことでもあるでしょうね。

原 僕は日本の美意識を資源として見たときに、「丁寧で緻密で繊細で簡潔」が特徴であると考えています。ひとつの例をあげると、日本の空港がとてもよく掃除をされていることです。

新見 ほんとうに驚くぐらいに潔癖症ですよね、日本人は。

原 じつは東京の夜景のきれいさもいい例です。たいへんな密度と広がりのある都市に点灯しているあまねく光が、ほとんど切れたりせずにちゃんと灯っている。香港やムンバイの夜景がきれいだって言われますが、飛行機で降りてくるときに見える東京の夜最が一番きれいですよ。これは国際線の飛行機の機長がテレビ番組で同じことを言っているのを聞いたことがあります。

緻密で、丁寧で、繊細で、簡潔である。こうした特徴がこれだけ揃っていることは。ほかの国には滅多に見られません。これが日本の大きな資源だし、可能性だと思っています。



見るべきものを見る目を大切にしたい

原 今日はそのことを考えたいと思って、ある映像を持ってきました。写真象の石元泰博さんが桂離宮を撮影して、これまでに四冊の写真集になっています。

石元さんはサンフランシスコ生まれの日系二世。戦争のときにコロラドの日米入の収容所に収監 きれるのですが、シカゴに出ることは許されて、そこでバウハウスに出会います。当時のシカゴに は、ナチスに迫われたドイツのバウハウスの教師たちがたくさん亡命していました。最後の学長のミース・ファン・デル・ローエがイリノイエ科大学を作って学長を勤め、モホーイ=ナジがニュー・バウハウスを作ります。石元さんはそのニュー・バウハウスに入学して、写真の勉強をします。

そうして、当時のバウハウスの考え方を学び、モダニストとしての感覚を身につけた石元さんが日本に戻ってきて、撮ったのが桂離宮です。僕は、この写真は、いま私たちが再発見すべき日本の価値に気づかせてくれるものではないか、と感じています。

新見 有名な写真集ですが、四冊もの写真集になっているとは知らなかったですね。

原 最初の一冊は日本で初めて世界デザイン会議が開催された 1960 年の刊行です。石元さんが 1954 年に撮影したモノクロの写真が使われている『桂 KATSURA 日本における伝統と創造』。 著者は日本の著名な建築家丹下健三、もうひとりの著者はバウハウスの初代学長のヴァルター・グロピウスです。グロピウスは西洋のモダニズムのひとつの理想が桂離宮にあると捉えていたようです。レイアウトを手がけたのが、これもバウハウスで教官をしていたハーバート・バイヤー。 つまり、この一冊はモダニストが捉えた桂離宮という集積であり、いま見てもすごく刺激的ですね。

新見写真のトリミングなど、これはもう、バイヤー流のコラージュですね。

原 二冊目が、1971 年の刊行で、亀倉雄策さんが、レイアウトを担当してリニューアルされたものです。グロピウスが著者から外れて、行き過ぎたモダニズムを少し戻そうという意図を感じます。

三冊目の『桂離宮 空間と形』が、1981年。ちょうど桂が昭和の大改修をして、写真はカラー撮影をされています。装丁が田中一光さんで、お弟子さんの太田徹也さんがレイアウトをしています。 序文を書いているのが磯崎新さんですね。

こうして、歴代の錚々たるデザイナー、建築家たちが石元さんの見る桂離宮に引き込まれてしまうことは驚くべきことだと思います。

最後の四冊目は、2010 年に刊行されました。最初の写真集のモノトーンの写真をトリミングしないで、石元さんが撮ったままを太田徹也さんがレイアウトし直した。すごく美しいと素直に感動を抱きました。これは日本にとっての観光資源とは何かということを考えるときに、ものを見立てていく価値観の存在を信じさせてくれるものだと思います。見るべきものをきちっと捉えて、見ていくことの価値ですね。

新見 桂離宮そのものもすごいけど、やっぱり石本さんの目ですね。その自然に、細部に神が宿っていることに気がついた目は、バウハウスの目でもあったけれど、彼自身の内なる日本人の目でもある。



文化を総動員して、本来の価値の読み直しへ

原 じつはいま、二期倶楽部の新しいホテルをつくるプロジェクトに関わっています。

先般、その関係でインドネシアのリゾートホテルを視察にいってきました。バリには評判のいいリゾートホテルをいくつも経営しているアマングループがあります。実際に見てみると、それぞれたいへんすばらしいホテルでしたが、私たちが目指したいのはこれではないな、ということがわかりました。

新見 今度の新しいホテルは神奈川県の海辺で、三浦半島の荒崎にできる予定ですね。

原 手つかずの自然のなかではなく、ふつうの漁港に近い。でも、見晴らす視線の向こう地平線という場所です。建築家はプラジルのアルヴァロ・シザで、楽しみにしています。僕もたいへん好きな

ポルトガルの建築家で、白い豊かな空間をみごとにつくる人です。建築そのものに触れることで癒される空間が格別ですね。

荒崎のように東京近郊の場所は、わざわざリゾートに出かけるのではない、仕事をしながら良質な休息を取りたい人にとって重要でしょう。

新見 二期にとっても新しい試みで、楽しみです。原さんは、トータルなアート・ディレクションをご担当になるのですね。

原 はい、利用される方が到着して、どんな風に迎えられるかから始まって、出立の瞬間に至るまで。見て、触れて、食べて、動いて、楽しんで、眠ってなど、経験されることのすべてをつないでいく仕事です。

日本の文化は。そういうものを美意識によってまとめていく、じつに高度な文化を持っていました。 茶の湯にしても生け花にしても、全部そうですね。

新見 過ごす時間そのものがどのようにデザインされるか、それをまとめていくのはたいへんな仕事です。

原 いま中国は経済の発展に伴って、ホテルなどもすさまじい開発が行われています。でも、それはやっぱりちょっと違うのではないか、と。アジアのなかの、日本のなかの、やっぱりあそこに泊まってみることを体験しないと大切なことがわからない。海外の人からも、そんな評判になるような、日本ならではの価値を作っていくべきだと思っています。

日本列島の回りが海に囲まれ、森が迫ってきている自然の環境。そこに自分たちの文化を総動員 して、本来の価値を読み直していくことをいまやらなくてはいけない。そういうことが、このプロジェ クトで問われているのだろうと思います。

新見 そうですね。こうしてアート・ビオトープを作って、山のシューレを始めたことも。本当の喜びって何だっただろうか、子どもに還るような体験を改めて呼び戻す試みだと思います。子どものときにはまさに五感を使って、自分で手を動かして遊んでいた。そういう楽しさを取り戻していくようなことも、ぜひ実現していただきたいと思います。





原 研哉 (はら けんや)

グラフィックテザイナー 1958年生れ。武蔵野美術大学教授。「もの」のテザインではなく「こと」のテザインを志向し、2002年より無印良品のアートディレクションを担当。「RE DESIGN」「HAPTIC」「SENSEWARE」など展覧会と書籍を基軸とした複合プロジェクトを数多く手がける。著書に『デザインのデザイン』『白』など。



新見隆(にいみりゅう)

キュレーター 1958年生れ。武蔵野美術大学数授。イサム・ノグチ庭園美術館学芸顧問。 二期リゾート文化顧問。ジャポニズムを端緒とした比較空間、空間感覚学から、美術・デザイン・建築の影響史、受容史、比較文化史、芸術社会学までを研究領域とする。